

カラオケブームは音楽教育に何を警告するのか

吉 永 誠 吾

What does a Boom in Karaoke imply to Music Education?

Seigo YOSHINAGA

(Received September 2, 1996)

はじめに

カラオケといえば、それはパチンコとともに今や日本の大衆文化の象徴ともなっており、外国人が日本人の好む娯楽として、まず最初に指摘するのではなかろうか。いわばカラオケとパチンコは外国人にとって日本人の顔となっているといっても言い過ぎではないと思われる。しかし、カラオケもやはり音楽であることに違いはない。これほどカラオケ、すなわち音楽が好きな日本人の多くが、子供のころはたして小学校の、あるいは中学校の音楽の時間に、まさにカラオケを歌っているときのように楽しく歌っていたであろうか。否である。「唱歌校門をいでず」¹⁾とはすでに言い古された言葉であるが、我々音楽教育に携わるものにとって、いまだに解決の糸口がみつからない、いわば永遠の課題なのである。それではいったいカラオケの魅力とは何なのであろうか。子供のころ、苦虫をかみつぶした顔をして歌を歌っていたはずの同じ人間が、これほどまでに喜びに満ち溢れて歌っているそのカラオケとは何なのかを探ることは、今日の、いわば迷路に迷いこんでしまった日本の音楽教育の在り方を考えるうえで大いに意味のあることであると考え

I 音楽とは何か

音楽とは何かなど、いまさらとも思えるがここで改めて考えてみる。

1 音楽とは何か

まず、古代ギリシャでは音楽にあたる言葉は「ムシケー」であったが、これは始めは音芸術、詩芸術、舞踊芸術を含む広い意味に用いられた。しかし、後には狭義の意味で音芸術にも用いられた。古代エジプトでは宗教音楽も世俗音楽も同じように「hy」と呼ばれ、この言葉は元来喜びを意味したとされる。古代インドではサンスクリット語の「samugita」は音楽、器楽、舞踊を意味した。中国では「音楽」というより「楽」の文字が用いられ、その「楽」とは《礼記》によれば「凡そ音の起こるは、人心に因りて生ずるなり」と書かれている²⁾。そのほか哲学者や音楽学者などによってさまざまな定義が与えられているが、ここではそれらをすべて省くことにする。

2 「音楽」の定義

もし「音楽」という言葉に振り仮名を付けるとするなら「音を楽しむ」となるであろう。したがって、ここでは「音楽」とは「音を楽しむ」ことであると定義する。そしてさらに音楽を「能動的音楽」と「受動的音楽」の二種類に分けることにする。

3 能動的音楽と受動的音楽

我々人間が音楽を楽しむ場合を考えると、つぎの二通りの楽しみ方が考えられる。その一つは自分自身で歌ったり楽器を演奏したり、あるいは何かの音を発して楽しむ場合、もう一つは、自分は何もせず、聞こえてくる音を聞いて楽しむ場合の二通りである。そしてその前者が「能動的音楽」であり後者が「受動的音楽」である。たとえば、暴走族の爆音は彼自身にとっては能動的音楽であり、アメリカの現代作曲家ジョン・ケージの作品「4分33秒」などは受動的音楽といえるであろう。

II カラオケの魅力を探る

1 カラオケ大会に参加して

筆者は縁があって、カラオケ大会に審査員として招かれたことがある。そのきっかけとなったのは、筆者が顧問をしている熊本大学フィルハーモニーオーケストラの平成6年の夏の巡回公演である。玉名郡天水町で通常のコンサートを終えた後、町の公民館に宿泊したのであるが、その際に、公民館の職員の人達と酒を酌み交わすうちに、その話が決まってしまったのである。日ごろクラシック音楽にしか付き合ひのない筆者にとって、勿論迷いはあったものの、これも一つの社会的貢献であろうと考え、お引き受けしたしだいである。

そのカラオケ大会は、同じ年の10月15日、新しく整備された丘の上の公園で行われた。有明海を一望に見渡すことが出来る、大変景色の良い公園である。審査員は筆者のほかに、玉名女子高校の片山敬子教諭の2人であった。伴奏はプロのバンドが雇われていたので、厳密に言えばカラオケ大会とは言えないのであるが、歌謡曲のコンクールの場合、カラオケ装置を使うかプロのバンドを雇うかを問わず、カラオケ大会という言い方に疑問はないものと思われる。

まず、このカラオケ大会に参加して、その出場者の多いことに驚かされた。そのため、本選出場者を選ぶべく、カセットテープによる予備審査を行ったほどである。また、その出場者は、地元天水町よりも熊本市など、他の市町村からの応募者が圧倒的に多かった。そして、遠くは荒尾市、大牟田市あるいは福岡市からの応募者もあった。

演奏内容も全体的に非常にレベルの高いものであり、素人のどじまんのものではなかった。たとえば、音程が全体的にとてもよく、ビブラートのかけかた、テンポルバートなども本物そっくりであり、中にはコスチュームにまでしっかりと凝っている（たとえばピンクレディ）のもあり、とても楽しい時間を過ごさせてもらったと思っている。優勝者あるいは準優勝者の演奏はもはや素人のそれではなく、まさにエンターテナーそのものであった。

2 カラオケの魅力を探る

これらカラオケ大会の出場者の多くは、はたして子供のころ、学校の音楽の時間にどんなふう
に歌を歌っていたのであろうか。おそらくは、今でもそうであるように、その多くが調子外れの

怒鳴り声で歌っていたにちがいない。それではいったい、カラオケのどのようなところが、これらのエンターテナーたちをして今日このようにあらしめたのであろうか。はたして、今でも多くの音楽教育者たちが口を揃えて言っているように、教材が悪いのであろうか。はたして、西洋音楽一辺倒が悪いのであり、歌謡曲、ポップやロックその他、民族音楽や我国の伝統音楽を多く取り入れることによって、そこにこそその解決の道があるのであろうか。

筆者はすでに、建物の構造が音楽の様式に影響を与えることを指摘した。つまり、石や煉瓦で作られた建物の内部の空間の適度な残響は、西洋音楽の今日までの発展に大いに貢献しているのである³⁾。そして、洞窟やほら穴で音を出すことの楽しみは、何も子供だけに限らずとも、特に音楽に興味がない人にも充分面白いものなのである。

そこまで論を進めて行くと、カラオケ装置に使われているエコー装置が思い浮かぶであろう。このエコー装置こそ、西洋音楽になくしてはならない存在であった建物の残響に取って代わるものなのである。しかも、電気的であるなしかかわらず、この残響は音楽の演奏を良くする重要な鍵を握っている。一つには、発せられた音を美しくつややかにする働きがある。そして更に、発せられた残響を演奏者が聞くことによって、ある程度音程の良さあしを判断することができるのである。

おそらくは、カラオケ愛好者たちの多くは、このエコー装置に助けられて（勿論プロのバンドの伴奏が録音されていることも含めて）彼ら自身の歌唱力ないしは音楽的表現力をみがいたにちがいないであろう。

3 エンターテナーあるいはエンターテインメント

筆者は、平成1年から2年にかけて、及び7年から8年にかけて、ミュンヘン国立音楽大学に留学することが出来た。ミュンヘンは人口130万、南ドイツ、バイエルン州の州都である。そこには世界的に有名なオーケストラが三つある。バイエルン放送交響楽団、バイエルン国立歌劇場管弦楽団およびミュンヘンフィルの三つである。いわば、福岡市程度の都市に、NHK交響楽団程度のオーケストラが三つあると考えれば良いであろうか。バイエルン放送交響楽団といえば、ラファエル、クーベリックなどが活躍した名門オーケストラである。バイエルン国立歌劇場管弦楽団は、永い間ウォルフガング・サバリッシュが監督として活躍し、特にモーツァルトのオペラでは世界最高の名演として知られている。ミュンヘンフィルでは、まぼろしの指揮者として世界的に有名なセルジュ・チェリビダッケが音楽監督であった。西洋音楽がキリスト教二千年の歴史の中で、人々にいかに愛され親しまれてきたかは、このような事実がそのことをよく物語っている。

そのような環境の中で、音楽の研究に専念できたことは筆者の音楽観を大いに変えた。建物の構造が音楽の様式に影響を与えたことについては、すでに述べたが⁴⁾、そのほかにも空気が乾燥していること、地震がないことも西洋音楽の発展に大いに影響があったこともわかった。

例えば、フィンクとよばれている鳥がいる。ごくありふれた鳥である。もずくらいの大きさであるが、とても人懐っこい。この鳥がまるでおしゃべりでもしているかのように鳴くのである。ヨーロッパはほぼ1年を通じて空気が乾燥している。従って、音もよく響く。鳥もそれをよく心得ているのであろう。まるで、自分の声が辺り一面に響き渡るのを楽しむかのように、とても良い声で鳴く。

地震がないことは、建物の天井をより高くすることができる。この高い天井は石や煉瓦で作られた建物の音響をさらによくするのである。よくよく考えれば、人間が永い歴史をかけて築き上げた音楽芸術も、本質的にはこのフィンクのさえざりと何ら変わらないのではなかろうか。筆者

はさきに、音楽を能動的音楽と受動的音楽に分けると述べたが、この能動的音楽は一種のエンターテインメントであるとも言えよう。その意味では、カラオケもオーケストラやオペラの名演も、あるいは鳥のさえずりですらも、本質的には同じといえそうである。フィンクのさえずりは勿論、芸術とは比べものにならないが、生きている証を空にむかって叫んでいるようなその声は思わずききほれてしまうほどである。

III カラオケブームは何を警告するのか

筆者はすでに、学校の音楽室がおかれている環境がとても悪いということについて述べた。そして特に、音響をよくしなければならないことを指摘した¹⁾。それにさらに付け加えるとするならば、見た目の美しさということについても考えねばならないだろう。西洋音楽のその長い歴史は教会および宮廷の中で発展してきたのである。昔も今もヨーロッパにおいては音楽が演奏される場所はとても美しい。近代的なコンサートホールはそれほどでもないが、古い演奏会場ともなると、見事なシャンデリアによって明かりが灯され、思わず目を釘付けにさせてしまわずにはいられないような絵画や彫刻に囲まれている。筆者は二度にわたるミュンヘン滞在中で、かなりの分量の写真およびビデオカメラにその映像をおさめている。音楽室を取り巻く環境を考えると、単に音響の問題だけでなく、見た目の美しさについてもそれらの映像は大きな参考資料になるに違いない。とりあえずは、その写真をスライドにして授業などにも利用することを考えている。

それにももちろん、音楽の授業の中身が最も大きな問題なのである。つまり、我々音楽教育に従事するものが与えようとして与え得なかった音楽の喜びを、すなわちエンターテインメントを人々はカラオケの中に求めているのである。このことが我々音楽教育者にとって大きな警告でなくて何であらうか。まさに童謡に歌われているように「歌を忘れたカナリヤ」そのままに音楽の授業が行われている。しかし、音楽の中身については機会を改めて考えることとし、音楽室の音響及び見た目の美しさについて大いに考えるべきであるということを今回の結論としたい。

註

- 1) 山住正巳著「唱歌教育成立過程の研究」東京大学出版会、1967、P.245
- 2) 標準音楽辞典、音楽之友社、1971、P.187
- 3) 拙著「建物の構造が音楽の様式に与えた影響についての一考察」、熊本大学教育学部紀要、人文科学第44号、P.65～72
- 4) 前掲書
- 5) 前掲書、P.70～71